

障がい者スポーツから広がる地域の輪

米子市立淀江中学校 3年 永松 梨都

私の住む米子市は、トライアスロンの発祥の地として歴史が長く、毎年七月に『全日本トライアスロン皆生大会』が開催されています。全国からたくさんのアスリートが集い、多くの地元ボランティアが大会に携わって、交流を深めることでも有名な大会です。

今までボランティアをする機会がなかった私ですが、二年前、障がいのある方のトライアスロンが米子であることを新聞で知りました。その大会は『全日本Challengedアクアスロン皆生大会』というものでした。私はその大会がどのような競技なのか知りたくなり家族と会場に応援に行きました。スイムとランの二種目の複合競技で、小学生から大人の方まで約一〇〇名が参加される大会でした。車椅子や装具を付けて参加される方、視覚障がいの方と、さまざまな障がいをもちながら頑張っておられる姿に感動し、自分にもできることがあればお手伝いしたいと、昨年初めてボランティアに参加しました。担当はランのコースのカーブポイントに立ち、誘導することでした。初めてのことでドキドキしながら、頭の中では自分の役割を確認し、待機していると、毎年ボランティアに参加しているという女性が、

「私のほうが元気をもらうのよ。」

「一生懸命頑張っておられる姿って素敵だよ。」と、声をかけてくださいました。そのうち、「キッズコーススタートしました。」とアナウンスの聲がし、一気に緊張が走りました。たくさんのボランティアの声援が大きくなるにつれ、拍手の音も大きくなり、アスリートと伴走者の姿が次々と視界に入り、力強く走ってこられたのです。周りのボランティアの人たちが「〇〇さん、もう少しだよ頑張って。」「〇〇ちゃん、速いね。」と名前を呼びながら声援を送られていることに驚きました。事前に

名簿をいただいていたことを思い出し、ゼッケンを見て私も一人ひとりの名前を呼びながら声援を送ると、自分の名前を呼ばれて少しはにかみながら、でも、とっても嬉しそうな笑顔で走ったり、時には立ち止まって手を振ったり、とても満足そうな姿があちこちで見られました。名前を覚え、声に出して応援することって素敵だなと温かい気持ちになりました。ゴール付近では、晴れ晴れした顔で

「いっぱい練習しました。」

「楽しかったです。」

「また来年も出ます。」

と口にされ、その言葉と共に、達成感でいっぱいの笑顔は皆さんの一年間の努力が発揮できたという喜びの姿であり、障がいという言葉忘れて、皆さんの姿に感動し胸がいっぱいになりました。

障がいがあるからできないのではなく、障がいがあってもなくても努力をすることの大切さや、前へ前へ進むことで大きな力になるということは誰もが同じであると改めて学んだ一日でした。と同時に、「私のほうが元気をもらうのよ。」とおっしゃった女性の言葉を思い出し、納得しました。私もいっぱい元気をもらったからです。

この大会に携わるボランティアの人たちは『私達助ける人』『私達助けられる人』という考えはやめて、『ともに楽しむ、共に創る』が最大の目標だということも知りました。そして、現在の課題は、障がい者と住民とのコミュニケーションを持つ場が少ないことだとも聞きました。

ボランティアに参加して、日本トライアスロンの発祥の地である皆生から、障がい者スポーツが今より身近で、誰からも愛される競技となり、障がいのある方のチャレンジする場や活躍する機会が増え、一人でも多くの皆さんが活躍されるよう、これからも力いっぱい応援していきたいと強く思いました。大会に参加される障がい者の皆さんと同じように、私もこの大会を楽しみにしています。